断章 旭川のアイヌ語地名研究 ⑩

高橋 基

―ハルシナイから上流の地名⑩―

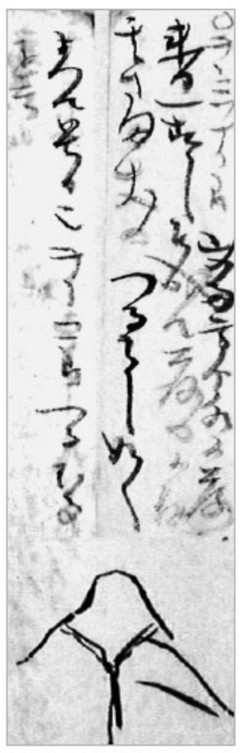
掲載地図は、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎が、アイヌの人たちが漕ぐ丸木舟に乗り、ハルシナイから上流へ上りながら、地名を記録し、幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」に記載したものを、現行の五万分一の地形図に落とし、したものである。ただし、表記は解説文のものである。また、前号で見たように、シネウシナイは、松浦武四郎がこの踏査に携行した野帳(フィールドノート)の『巳第二番』の記録や、安政六年(一八五九年)に作成した『東西蝦夷山川地理取調図』には掲載されながら、「再篙石狩日誌」では、脱落していたものである。

今回は**掲載地図**のポロとポンが付いたオウコッナイを中心に見ていきたい。オウコッナイは、全道各地に見られるアイヌ語地名で、昭和三十一年に刊行された知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では、次のように解説されている。

o-ukot-nay オウコッナイ二つの川が川尻で合流しているものを云う。「o(陰部が)u-(おたがい)kot(にくっついている)nay(川)」興部町の起源になった、興部川のオウコッペ(o-ukot-pe川尻が・お互いにくっついている・もの=川)が、最も有名である。

さて、**写真**は、『巳第二番』に記載されたオウコッナイの松浦武四郎の解説である。

ヲ、コッナイは山の両方より水が落来り一すじと成て落るが故に、其さま犬がつるみし如くによつて号る也。ヲ、コッはつるむ事を云。



『巳第二番』

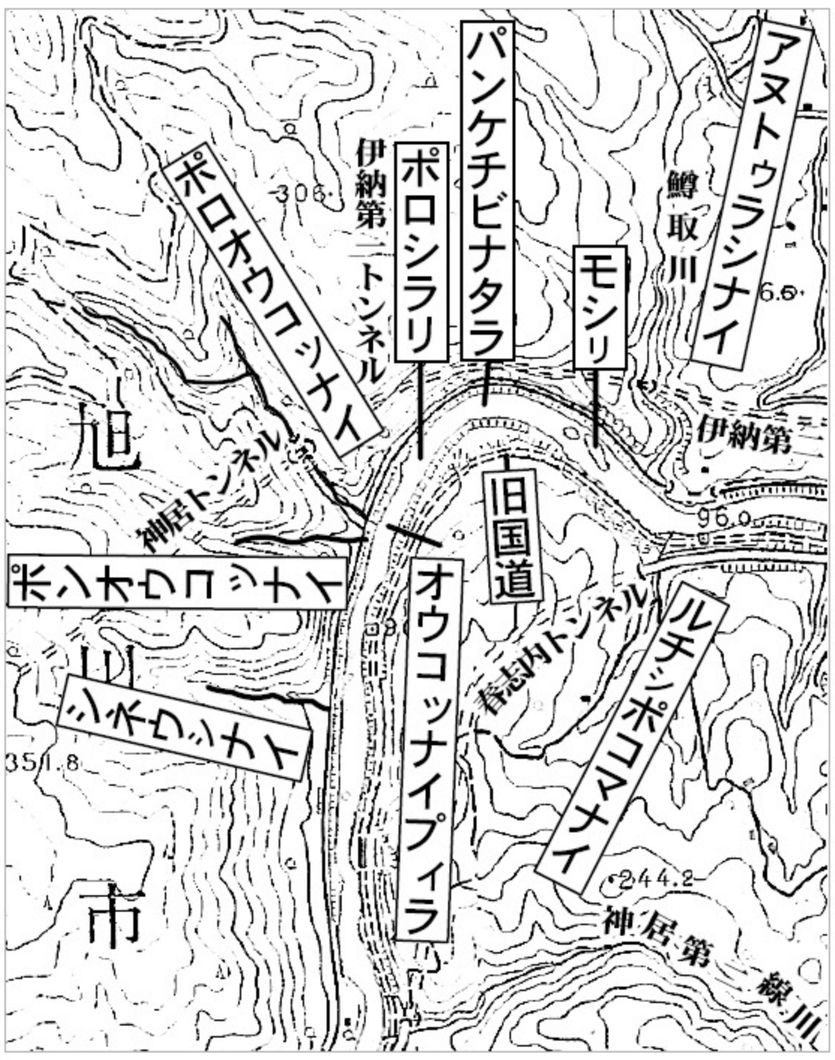
「再篙石狩日誌」では、トウレプサラニプ(turep-saranip オオウバユリの鱗茎・―を入れた―手さげ籠)から三丁(約三二七メートル)上流に、ヲ、コッナイの小さい川のポン(pon 小さい)、その一丁(一〇九メートル)上流に大きい川のポロ(poro 大きい)ヲ、コッナイがそれぞれ次のように記述されている。

ホンヲ、コッナイ

小滝左りの方に有。前に一ツの岩有。一丁少し上りて

ホロヲ、コッナイ

左りの方少しの滝也。川岸はふかく前に大岩一ツ有。其また両方急流有をヲ、コッナイフイラと云。ヲ、コッと云は犬の交合の形を云。此沢両山より細流二すじ落来り、其二筋合して一流と成。其流を遠くより見るに、犬の交合のごとしと云よし。



松浦武四郎は、ポンとポロの付いた完璧な形のオウコッナイを採録した。しかし、両川の川口(知里のいう川尻)は、松浦が書いているように、現在も一丁離れていて、川口が合流していない。他方、松浦がホロヲ、コッナイで書いた、「其二筋合して一流と成」という状況もこの川の川口にはなく、語意は判然としているが、問題の残る地名である。

明治二十三年に調査した永田方正は、「オウコッナイ(oukot-nai合川)―川末の合流スルヲ云フ」と書き、ポン・ポロの採録はない。

昭和三十五年に知里真志保は、「オウコッナイ(o-ukot-nai 川尻が・つながりあっている・川)。或は、オオコッナイ(oo-kot-nai 深・谷・川)の転訛か。」という転訛説も書いている。

アイヌ語地名の意味は明確だが、先に書いた問題が残り、その解明を今後の研究課題としたい。

掲載地図のポロオウコッナイの沢を見ていただくと、JR函館本線の伊納第一トンネルと、神居トンネルがこの沢で、わずかな区間が開いていることが分かる。昭和四十四年に滝川～旭川間が電化・複線化された時に、この沢と旧国道十二号の間に、工事用の「神光橋」が架設され、この沢の沢口には、工事関係者の宿舎など多くの建造物が建っていた歴史がある。松浦武四郎がこの沢を見た約百十年後のことであった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します